

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

保健医療学部

リハビリテーション学科作業療法学専攻

岡本 絵里加

(2024年9月4日作成)

1. 教育の責任

本資料作成者である岡本絵里加(以下、作成者)は、保健医療学部リハビリテーション学科 作業療法学専攻の教員として、以下の授業科目を担当している(見学実習・地域リハビリテーション実習・評価実習・臨床総合臨床実習は割愛)。各授業のシラバスは、湘南医療大学 WEB ポータルサイト上で本学学生並びに教職員に公開されている

科目名	開講年度	必修・ 選択	受講 者数	単位 数
作業療法基礎ⅠA (作業療法学専攻)	1年前期	必修	40	1
作業療法基礎ⅠB (作業療法学専攻)	1年前期	必修	40	1
作業療法基礎ⅡA (作業療法学専攻)	1年前期	必修	40	1
作業療法基礎ⅡB (作業療法学専攻)	1年後期	必修	40	1
作業療法評価学(身体Ⅱ) (作業療法学専攻)	2年前期	必修	40	1
身体障害作業療法Ⅰ(総論・中枢神経系) (作業療法学専攻)	2年後期	必修	40	1
生活支援機器論 (理学療法・作業療法学専攻)	3年前期	選択	40~50	1
運動学演習(応用) (作業療法学専攻)	3年前期	必修	40	1
老年期作業療法学Ⅰ (作業療法学専攻)	3年前期	必修	40	1
作業療法評価学総合演習 (作業療法学専攻)	3年後期	必修	40	1
地域作業療法学Ⅳ(身体障害・発達障害)	3年後期	必修	40	1
身体障害作業療法Ⅲ(応用)	3年後期	必修	40	1
老年期作業療法学Ⅱ (作業療法学専攻)	3年後期	必修	40	1
作業療法特論Ⅳ(がん) (作業療法学専攻)	4年後期	選択	40	1

私は、湘南医療大学のリハビリテーション学科(理学療法学専攻 40 名、作業療法学診療専攻 40 名)において、主として作業療法学専攻学生の専門教育科目を担当している。作成者が担当している講義においては、身体障害領域・老年期障害領域の知識や実技指導に係る科目を中心としている。作業療法士を目指す学生として、実習および国家試験の合格到達レベルを目標に教育を進めている。

また、学内業務として、20214 年度入学生の副チューター長として、学修状況の支援や生活指導に、必要に応じて保護者との連携など学生のサポートを行っている。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

本学の理念である「人を尊び、命と尊び、個を敬愛す」とあり、その内容の中で「1. やさしさと思いやりのある保健・医療・福祉・教育の実践 2. 生命を全うしていただくための 知識・技術の習得 3. その人らしさと個別性を尊重し敬愛す」としてある。その中で特に、私は「3. その人らしさと個別性を尊重し敬愛する」という内容を特に大切にしている。学生への教育においては、障害をもった方がどのような環境でも、住み慣れた地域で「その人らしい生活」が送れるような作業療法思考過程をもてるよう意識をしながら教育を行っている。湘南医療大学では、教育の目的や使命において、「豊かな人間性と行動な専門性を併せ備えた人材や臨床現場でチーム医療ができる人材、地域に必要な医療人の養成を行い、地域社会に貢献できる職業人の輩出」を主たる目的とされており、学生教育にも力を入れている。

教育で最も目指したいものは、学生1人1人の個性をみながら、作業療法士の楽しさややりがい伝えていける教育を行うこと、また、国家資格を取得し、クライアントがその人らしく生きられるよう支援できる作業療法士となってほしいと考えている。

2) 理念をもつに至った背景

私は、臨床現場で急性期から回復期の身体障害領域を中心に精神障害、発達障害領域なども関わってきた。大学病院に勤務していたため、様々な疾患や領域の対象者と関わる機会が多く、地域まで長期間に関わることも少なくなかった。対象者1人1人が色々な人生の背景があり、それぞれの大切である生活を見出すことが作業療法士の思考過程として重要であると考え、講義やオープンキャンパスの入学前の学生にも伝えている。研究としても、作業療法士として、前述した「その人らしい生活」を送れるように介入することが重要だと考えており、臨床現場でも「その人らしい生活」を行えるよう意味のある作業を実施した作業療法の効果を示す研究を行ってきた。いる。また、一昨年より認知症家族の会主催で実施されている若年性認知症のつどいや認知症カフェで作業療法士として関わり、地域で認知症をもつ人がその人らしくできる活動を支援し、認知症家族介護者の困りごとに対して、助言を行うことや専門職へつなぐお手伝いをさせていただいている。その経験から、家族介護者の困りごとには

様々な背景があり、家族介護者も自分らしく過ごす時間の縮小を感じていることが多く、認知症の人も家族介護者をも大切にしたい支援の在り方と専門職を目指す学生へ地域に向けたさらなる教育が必要であると感じた。

3. 教育の方法・戦略

授業の戦略においては、実技指導に関しては演習を行い、形成評価を用いて、一单元終了ごとに実技や関連する知識の習得を確認し、不十分な学生においては再度指導を行っている。座学の講義においては、アクティブラーニングも一部用いて、グループワークを通して学んだ知識を臨床場面や患者様に対してどのように支援・対応するかなど様々な課題で取り組むよう授業設定をしている。

また、教育実践の応用については、インストラクショナルデザインを用いて、パーソン・センタード・ケアにおける作業療法学生に向けた認知症教育プログラムを開発し、実践した。学習効果を図るため他大学で所属先以外にて実施。質的な評価とアンケート調査による量的な効果測定を行った。また、コロナ禍の影響から認知症教育プログラムのオンライン版を考案し、既存の対面版と学習効果を比較するため所属先以外他大学にて実施。アンケート調査による量的な効果測定を行った。

授業

4. 学習成果

授業評価においては、昨年度は育休中のため未実施である。今後の授業アンケートを参考に自身の授業設計の改善、振り返りを行う。

また、上記研究における教育実践の応用については、認知症教育プログラムの学習成果として、授業のアンケート結果からは学習満足度、参加度ともに高く、自由記述では認知症の人の視点を捉える記述をしていた。症例検討からレポートによるルーブリック評価とアンケート結果から学習効果を検討した。レポート評価からは症例の① 認知症の症状や状態、② 問題点と利点、③ 目標、④ 支援の内容を課題とし、②～④の項目で学習効果が認められた。①は授業で学習していた影響から初回の提出からよく記載されている内容が多く、変化が少なかった。また、今後、プログラムの確立に向けて、複数の OT 養成校に在学する学生を対象とした検証が必要となる。

5. 改善のための努力

授業評価においては、昨年度は育休中のため未実施である。今後の授業アンケートを参考に自身の授業設計の改善、振り返りを行う。

教育実践の応用については、ルーブリックの改良などより多くの養成校で使用できるよう認知症分野の教育に関わってきた様々な大学の教員と意見交換や検討を重ねている。よりよい学習成果や学習成果を導く教材をさらに作成していく予定である。

6. 今後の目標

学生が作業療法士を目指す志が高くなるよう作業療法士のやりがいや楽しさを講義や演習を通して伝えていく。自ら主体的に学ぶことができるよう教育手法を取り入れつつ効果的な講義や教材開発を行っていきたい。また、臨床に出る意欲を高められるよう授業を展開する教育手法のみでなく、学生達との関わりを通して積極的に取り組み、学生の生活指導等も行っていく。